檻（おり）

北方謙三

檻（おり）

一九八三年三月二五日　第一刷発行
一九八三年四月二〇日　第二刷発行

定　価　九八〇円

著　者　北方謙三

装丁・写真　荒川じんぺい

発行者　堀内末男

発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部（〇三）二三八―二八四二
販売部（〇三）二三〇―六一七一

印刷所　大日本印刷株式会社

検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

©1983 K. KITAKATA, Printed in Japan
ISBN4—08—775037—X　C0093　¥980E

檻（おり）

第一章

一

そいつは助手席にふんぞりかえり、煙草に火をつけて、勢いよく煙を吹きあげた。マッチを無造作にフロアに捨てる。

「その酒場ってのは、どのへんなんだ？」

遠いとも近いとも言わず、ちょっと頷いてみせただけで、滝野和也は静かに車を出した。

霧のような雨が降っていた。まだ宵の口だが、住宅街にはほとんど人影はなかった。

「酒で騙さりゃしねえからな」

落ち着きのない男だった。爪を噛み、ウィンドグラスに額を押しつけて外を眺め、煙草の煙を吐き出してはせわしなく灰を落とす。右膝は貧乏ゆすりをしていた。

派手なジャケットに季節はずれのアロハの襟を出し、はだけた胸にはコインのペンダントをぶらさげている。二十四、五。そういう恰好のおかしさ加減が、そろそろわかってもいい年頃のはずだ。

「さっきのは、かみさんかよ？」

滝野はかすかにほほえんだ。こいつは、幸江が女房であることを知っている。それに、滝野のことを社長と呼んだ。喫茶店の主人を、普通社長などと呼んだりはしないものだ。ただの小遣い銭欲しさで騒ぎを起こしたわけではなさそうだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「いかす女じゃねえか、この野郎」
男がフロアに煙草を捨て、踏みにじった。まったく、新車を気前よく汚してくれるものだ。ちょっとスピードをあげる。愚図愚図していると、唾でも吐きかねない。
「だけど気の強ええ女だな。俺りゃ、あんなのに弱くてよ。睨みつけられた時にゃ、背中がゾクッとしやがったぜ。ほんとのところ、あんたが飲みに誘ってくれたんでほっとした。あのまんまじゃ、俺りゃ暴れていたかもしれねえ」
見慣れた街並を五分ほど走った。
小学校、青果市場、教会、そして小さな公園。
停めた。濡れたベンチに、アベックの姿はないようだ。
男はきょとんとしていた。ウィンドに顔を押しつけ、それからふり返った。
「なんだあ、ここは？」
滝野は車を降りた。ためらいはなかった。自分の中で、すでになにかが切れている。認めたくはない。五年間で身についた、習慣というやつもある。それでも、切れていた。
公園に入り、水銀灯を背にして男が降りてくるのを待った。助手席のドアが開く。躰の力を抜いた。深く、ゆっくりと息を吸い、吐いた。
「てめえ、どういう気だ。酒場なんかねえじゃねえか」
男の眼を見つめたまま、滝野は無意識にズボンのポケットに両手を突っこんでいた。暗い公園を見回しながら、男が近づいてくる。動かなかった。男の足が停まった。滝野は一歩踏み出した。水銀灯に照らされた男の顔に、かすかな狼狽と怯えの翳が走ったように見えた。さらに、一歩、二歩、男に近づいていく。男が、肩でも押されたように一歩退がった。不意に、奇妙な、快感に似たものが滝野の躰を走り抜けた。呼吸。それが完全に蘇っている。昔、躰で覚えこんだ呼吸だ。

「まさか俺とやろうってんじゃあるめえな？」
足もとの小石を、滝野は蹴った。男が首を竦める。石は闇の中に消えた。
「死にてえのかっ、てめえ」
男の眼が落ち着きなく動く。さらに歩み寄った。手はまだポケットの中だ。
「素人だからって、遠慮はしねえぞ」
吠えながら男が退がった。三歩。そこで踏みとどまった。身構えている。慣れた構えだが、覇気は感じられない。早い息遣いが聞えた。間合に入った。男が一歩退がる。滝野は二歩踏みこんでいた。両手もポケットから抜いていた。男の上体が、ガクリと前に崩れそうになった。それから吹っ飛んだ。臑を蹴りつけ、腰を捻りざまに肘で顔を弾いたのだ。
仰むけに倒れた男は、首だけ持ちあげて、ぼんやりした眼で滝野を見あげていた。
「ちゃんと立ってみろ」
肘をつき、のろのろと男が身を起こそうとする。踏みこみ、下腹を蹴りあげた。男は転がって腹這いになり、海老のように躰を折り曲げ、しばらくしてから呻きをあげた。
滝野は煙草をくわえた。霧雨に濡れないように掌で覆い、火をつける。
「誰に頼まれて、うちの店で嫌がらせなんかしたんだね？」
滝野は男のそばにかがみこんだ。男はまだ喘いでいた。顔の水滴が、水銀灯の光を照り返す。雨ではない。汗の粒だ。
男の上着の胸ポケットを探った。小さな硬いものが触れた。バッジ。見覚えのあるものではなかった。ほかに、身元を示すものはなにもない。ズボンのポケットで小銭がチャラついているだけだ。
「教えて貰いたいんだがね、それを」
滝野はバッジを自分のポケットに放りこんだ。男の襟首を摑んで上体を引き起こす。細く開いた眼で、

男は盗むように滝野を見た。くわえていた煙草を、襟首から男の背中に突っこむ。男の躰に電気が走った。滝野の手を振り切り、地面を転げ回る。それをもう一度引き起こした。
「名前は？」
「菊池」
口に拳を叩きこんだ。倒れたところを蹴りつける。顔、下腹、そこしか狙わなかった。鳩尾（みずおち）を蹴れば反吐を吐く。
「う、うそじゃねえ」
血まみれの言葉が男の口から出てきた。
「それは、わかってるよ」
顎を蹴りあげた。男は大の字に倒れて動かなくなった。それでも眼は開いていて、何度も瞬（まばた）きをくり返している。
「誰に頼まれたんだ？」
新しい煙草に火をつけた。二、三服吸ってから、同じ質問をくり返した。
「知らねえ」
「おかしな話じゃないか」
「ほんとに、知らねえんだ。俺りゃただ」
男が眼を閉じる。
「ただ、なんだね？」
眼を閉じたまま、男が首を振った。煙草の火を、男のはだけた胸に押しつけた。ピクッと男の躰が動いた。それでも声はあげず、首だけ激しく振り動かしている。
喋らせるのは手間がかかりそうだった。喋ってはならないことを、簡単に口にしないくらいの根性は

持ち合わせているらしい。滝野は煙草を捨てた。しばらく考え、無理に訊き出すのはやめにした。詳しいことはほんとうに知らないのかもしれない。事情もわからないまま、頼まれて荒事をやるチンピラはよくいるものだ。本格的ないやがらせなら、これだけで終るはずはない。・

服が、すっかり湿っていた。車を出す時も、男はまだ仰むけに倒れたままだった。

裏口から事務所に入った。八時半。二階の喫茶室の閉店時間は九時だ。

湿った上着をハンガーにかけ、滝野は隅のデスクに腰を降ろした。事務所と倉庫が兼用になっている。広さは八畳間くらいで、積みあげられているダンボール箱は、ほとんど食料品だった。

抽出(ひきだし)から帳簿を出して開く。ボールペンのキャップを抜く前に、ドアが開いて幸江が入ってきた。コーヒーの匂いも一緒だった。

「車が戻ってくるのが見えたわ」

トレイのコーヒーをデスクに置きながら幸江が言う。滝野は煙草をくわえ、湯気をあげているコーヒーに眼をやった。キリマンジャロ。幸江の趣味だ。コーヒーなど色がついていればいい。

デスクの前の折り畳み椅子に腰を降ろし、幸江はセーラムをくわえて火をつけた。自分の方へ流れてきた煙を、滝野は掌で払った。薄荷入りはあの方が弱くなる、そんな話をなんとなく信じていた。

「穏やかにお引き取り願ったよ。目腐れ金が欲しくてあんな芝居をやったんだろう」

「嘘よ。あなた、そんなことしやしないわ」

幸江が、セーラムを灰皿の縁に置いた。

「そんな気がしたの。あの男を連れ出した時、あたし怕(こわ)かったわ。あの男じゃなく、あなたが」

「考え過ぎじゃないのか」

滝野はくわえていたセブンスターを消し、ついでにセーラムも揉み消した。コーヒーには手を出さな

かった。まだ湯気をあげている。
「変ったわ、あなたは」
「どんなふうに？」
「わかんない。でも、一年前は、あなたを怕いなんて思ったことなかった」
幸江が二階で小さな喫茶室をはじめたのは一年前だった。変ったのは滝野だけではない。この一年で、幸江の化粧はかなり濃くなった。服装も派手になった。それにセーラムだ。
「いったい、俺がどうやってあの男に帰って貰ったと思ってるんだ？」
幸江が肩を竦める。
「泣いて頼んだんだよ。小さなスーパーの親父を苛めないでくれって」
「服が濡れてるのね」
「そう、地面に這いつくばって頼んだからな」
幸江は、ちょっと笑みを浮かべた。店の方は静かだった。シャッターを降ろし、すでに明りも消してある。不意に、デスクの電話が鳴った。受話器から酒の匂いが漂い出してくる。商店会長の吉田だった。駅前のバーにいるという。雨で客が少なく、店の女の子にでも頼まれたにちがいない。滝野は生返事をした。このところ、吉田は妙にしつこい。
受話器を置いた。新しい煙草に火をつける。
「煙草、多過ぎるんじゃなくて」
灰皿が吸殻の山になっていた。苛立って二箱以上空にしてしまう日が続いている。
「吉田の親父さんが『スワン』で待ってるってさ。一緒に行かないか。一杯ひっかけて、久しぶりに六本木にでも出よう」
「ほんと？」

「たまには、めしを食うのも悪かないさ」
「三十分、待ってくれる？　お店を閉めて、お掃除をしたら、すぐ来るわ」
「慌てるこたあない。俺もちょっと帳簿を見なくちゃならん」
幸江が立ちあがった。軽く頭を振り、肩の髪を背中の方へやる。サラサラした、癖のない長い髪だった。この髪だけは、結婚して以来まったく変っていない。
滝野は、開いたままの帳簿に眼を落とした。数字が並んでいる。それを見るのは好きだった。数字は、ただ数字だ。余計な意味など考えなくて済む。
帳簿のつけ方を、手取り足取り教えてくれたのは幸江だった。商業高校を出ていたし、結婚するまで小さな建設会社の経理課にいたのだ。滝野は工業高校で、しかも卒業していない。
私鉄沿線のありふれた商店街だが、滝野商店はそのほぼ真中のいい場所にある。一階が食品中心のスーパーで、二階の一角が喫茶室である。建物が四階建のビルになったのは四年前だ。それまでは木造の古びた乾物屋だった。幸江の父親が、ひとりで細々とやっていた。幸江と結婚して、店員のようなかたちで滝野が入ったのが五年前。それからすぐに父親が倒れた。いまもまだ老人病院に入院していて、滝野が誰なのかさっぱりわからない状態が続いている。
ビルになったのは、地主がそうしたがったからだ。乾物屋の奥が住居だったので、かなり広い土地だった。既得権を生かして一階のすべてのフロアをスーパーの店舗にし、住いは同じ町内のマンションに移した。多少の自己資金があった。それほど無理な借金はせずになんとかスーパーという形体に切り替えることができた。それから三年経ち、二階の雀荘のあとを改造して幸江が喫茶室をはじめた。駅のむこう側に大手のスーパーが進出してきたが、商売は一応うまく運んできた。
デスクの端のコーヒーが冷めていた。冷めたところを、砂糖もミルクも入れずに飲み干す。それが滝野のやり方だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

胃が妙に重苦しい。コーヒーの苦さが、いつまでも口に残った。煙草を二本喫っても、その苦さは消えなかった。

このひと月、不愉快な事件が続いていた。最初は、冷凍食品売場のケースから、鼠の屍骸が二つ出てきた。鼠は凍って、まるで作り物のようだった。それからしばらくして、一リットルパックの牛乳に、注射器で異物が混入された。それは五日ほどの間を置いて、二度続いた。混入されたのは毒物ではなくただの赤インクで、店に対するいやがらせだろう、と警察は判断した。所轄署から刑事が二人来て張り込んでいるが、犯人は挙がっていない。刑事が来た時から、一度もいやがらせは起きていなかった。

そして今夜のチンピラだ。スーパーが閉まり、張込みの刑事が帰ったあとに喫茶室で騒ぎを起こしている。しかし、一連のいやがらせと関係があると断定はできなかった。

損害の額は、かなりのものだった。冷凍食品も牛乳も、店に置いてあるものはすべて売物にならなかった。事故に備えて多少の保険は掛けてあるが、適用の対象になるかどうか微妙なところだ。いずれにしても、警察の捜査の落着を待たねばならない。

パチンコ屋が関係あるのだろうか。滝野はずっとそのことを考え続けていた。ひとつむこうの駅前でパチンコ屋をやっている大場という男が、スーパーの権利を譲らないかと持ちかけてきたのだ。二カ月ほど前のことだった。相場の三割増しという破格の条件だったが、滝野は問題にしなかった。商売というやつは、相場で割りきれないところがある。店舗面積を三割増やしてほかの場所でスーパーをやったとしても、うまくいくとはかぎらないのだ。

滝野は帳簿を閉じた。

幸江はまだ降りてこない。食欲はあまりなかった。酒も飲みたくはない。幸江と一緒に外出するのは、半年ぶりくらいだ。お互いに誘い合ったりはしなくなった。なんとなく、自然にそうなった。食事も別々にすることの方が多い。

すっぽかす口実が頭に浮かんだ。一瞬ためらい、滝野は電話に手を伸した。

二

デスクの前で女が泣いていた。御常連だ。言うだけのことを言うと、滝野はもう女の存在を気にとめなかった。

月に一度、つまり病気ってやつだろう。頭にぼうっと血が昇り、気がつくと店の品物に手を出している。女にはそうめずらしいことじゃない。亭主に連絡すれば、うんざりした顔でやってくる。差し出される封筒の中身は、品物の数倍の額の紙幣だ。だからたわけた芝居にも付き合ってやる。警察へ突き出せば、調書だ、被害届だ、と面倒が続くのはわかっていた。その上、一文にもならない。

それでも、毎月定期便のようにやってこられると、いい加減胸がむかついてくる。亭主に引き渡す前に、せいぜい凄味を利かせた脅し文句を並べてやらなければならないのだ。それが聞きたくて、盗みをしているとしか思えなかった。人間をおもちゃ代りにしている。こっちはロボットみたいなものだった。

ドアが開き、店長の本山が顔を出した。店長といっても店員は二人だけで、もうひとりは女の子だった。あとは主婦のパートでまかなっている。

「なんだ、お迎えじゃないのか」

「お客さんですよ。車のセールスマンかなにかじゃないかな。駐車場の車のところで待ってるそうですから。野田さんっておっしゃってました」

「俺に会いたい、と言ってるんだな」

名前に憶えはなかった。白のクラウン・ハードトップは五カ月前に買ったばかりの新車で、セールスマンなら見ただけで諦めるはずだ。

「頼むよ」
女の方を眼で指して滝野は言った。仕方なさそうに本山が頷く。地肌が透けるほど頭頂が禿げているので老けて見えるが、滝野よりひとつだけ年長の三十五歳だった。小さなスーパーの店長がお似合いの、平凡な男だ。

きのうからの霧雨はもうあがっているが、いつまた降り出すかわからないような雲行だった。
駐車場は、ビルの裏側の地続きにある。ちょっと見にはビルに付属した駐車場のようだが、地主は別だった。
白いクラウンのそばに、男がひとり立っていた。
グレーのストライプのスーツをきちんと着て、黒っぽいネクタイを締めている。隙のない身なりだが、頭髪が薄く、それが仕事に疲れた中年男のような印象を与えていた。だが、セールスマンではない。ただの勤め人でもない。臭い、がある。遠くからでも、滝野には嗅ぎ分けられる臭いだった。
近づいてくる滝野に気づいて、男が丁寧なお辞儀をした。二メートルほどの距離を置き、滝野は立ち止まった。
「社長さん、ですね？」
低い、落ち着いた声だ。滝野は頷いた。視線が合い、どちらもそらさなかった。
「野田って者です」
ふと、桜井を思い出した。声や仕草がどことなく似ている。歳恰好も近い。四十を出るか出ないか、というところだろう。もっとも、桜井は三十四で、六年前に死んだ。
「お呼び立てしちまって。あっしのような者が出入りすると御迷惑だろうと思いやしてね。外に出てこられた店員さんに挨拶を通させていただきやした」

見つめ合ったままだった。眼尻の皺が深い。ふっと、男の口もとだけが心なしか綻んだ。
「やっぱり、堅気さんじゃねえんですね？」
言葉の使い方も、桜井と似ていた。素人とかケモノとかいう言葉は決して使わなかった。堅気さん、いつもそう呼んでいたものだ。
「うちの若い者が、きのうお世話になりましたそうで」
襟にバッジをつけていた。滝野のポケットに放りこんであるのと同じものだ。
「落とし前でもつけろってのかね。ちょっとばかり筋違いじゃないかな」
「とんでもねえですよ。五分でやり合ってやられたんなら、つべこべ言う筋合いじゃありやせんや。ただ、バッジまで取りあげちまうってのは、どうなんですかね。野郎にしちゃ、金玉取られたみたいなもんでやんしょう」
「バッジねえ」
滝野は煙草をくわえた。ライターの火が風ですぐに消えた。顔を車の方へ寄せ、掌で風を遮る。
「コーヒー代に千円出して、釣りを受け取る時一万円札だったと言い張る。因縁をつけるにしても、馬鹿馬鹿し過ぎやしませんか」
「まったく、つまらねえ小遣い稼ぎをしようとしやがったもんで。お恥しいかぎりですよ。よく言い聞かせちゃいるんですが」
男の口調に、卑屈なところはまったくなかった。静かな声で、世間話でもする老人のようにさりげなく喋っている。眼だけが動かなかった。
「あの菊池って坊やは、なんでうちの店でつまらん真似をしたんですかね？」
「そりゃ、やっぱり」
「小遣い稼ぎじゃないな」

「いや、そうですよ」
「あの坊やは、バッジをはずしてた。胸のポケットに突っこんでましたよ。だから、こっちも頂戴しようかって気になった」
滝野は煙草を捨て、踏み潰した。
「そこんところがひっかかってね。どう見たって、バッジをはずして組の名前を伏せる分別を持った男じゃなかった。むしろ、ひけらかして喜ぶ手合でしたよ」
「つけてようがはずしてようが、バッジはバッジでしょうが」
「縄張の外だし、組の仕事じゃなかった。そうなると、うちの店でゴネた理由も、ただの小遣い稼ぎじゃないってことになる」
「縄張の外だから、バッジをはずしたと考えちゃいただけやせんか」
「あの坊やは、誰かに頼まれたって言いましたよ。誰かの名前は口を割らなかったがね。その誰かってのが、分別臭くて、組の名前を伏せさせたんじゃないのかな」
「その分別臭い野郎が、あっしだっておっしゃりたいんで？」
男が笑った。笑顔の底に、はっとするような凄味がじわりと滲み出してきた。これはチンピラには真似ができない。やわな男なら、見ただけで腰を抜かすかもしれない。
滝野は新しい煙草をくわえた。
「俺はほんとのわけを知りたいだけですよ。分別臭い男ってのは、また別の話だ」
「どうしても返してやっちゃいただけねえんですかい。菊池に代って、あっしが詫びを入れさせていただきやすが」
「詫びるって、どう詫びる気なんだね？」
「御存分にって言うほかありやせんね」

「あの坊やは、堅気の店で暴れようとした。ほんとなら、警察に始末をつけて貰うところだ」
「だけど、社長さんは警察を呼ばなかったじゃねえですか。自分の手で始末をつけなさった。それも金で話をつけるなんて生やさしいやり方じゃなくね」
男がまた笑った。仲間内じゃないか、ちょっと暗い翳を感じさせる笑顔が、そう言っている。一瞬、滝野はかっとした。その気配を、男は敏感に感じ取ったようだ。笑顔がすっと消えた。今度は、煙を吐きながら滝野が笑った。
「馬鹿馬鹿しくて、警察を呼ぶ気にもなれなかったんですよ。あんたがどんなふうに見たか知らないけど、俺は堅気ですよ。この街で五年も商売してるんだ」
「あっしらだって、商売はやってますよ」
「たかがバッジに、なんだってそうこだわるんです？」
「こだわってるのは、おたくも同じですぜ」
「絶対に返さん、と言ったら？」
滝野は煙草を捨てた。ズボンのポケットに手を突っこむ。
「腕ずくで取り返すかね？」
男が一歩退がった。眼は動かなかった。見つめ合ったままだ。
呼吸を三つ、数えた。踏み出す。男が退がった。滝野が踏み出す分だけ、男は退がっていく。駐車場の金網の柵。背にして立った男の躰に、瞬間、言い様のない気配がよぎった。攻撃を仕掛ける時の獣、似ているがそれともどこかちがう。こちらが受けた感じは、刃物を突きつけられた時と似ていた。しかし男の手に刃物などない。滝野は一歩踏みこみ、両手をポケットから抜いた。不意に、男の躰に張りつめていたものが消える。誘い。それなら乗ってやろう。足の爪さきに力をこめた。一歩。間合だ。それでも男は、人形のように隙だらけの姿で立っていた。瞬きひとつしなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com